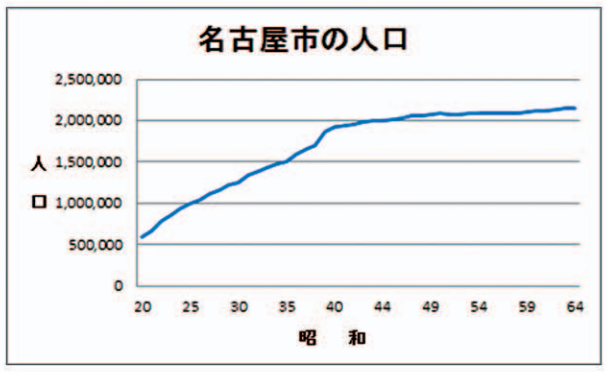
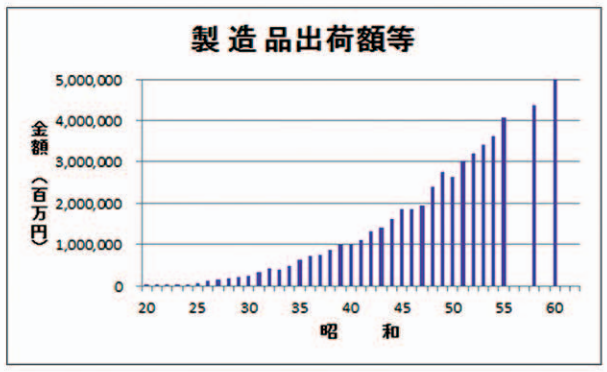
高度成長と浄化対策

昭和 30 年頃から、日本経済の高度成長が始まった。

名古屋も周辺市町村の合併もあって人口は増加の一途をたどった。昭和 20 年の 60 万人弱が 44 年には 200 万人を越えるという、急激な増加だ。工業生産も急速に延びていった。戦災で焼け野原になった 20 年はわずかに 12 億円余だったのが、41 年には1兆円、48 年に2兆円を越えるという、物価の上昇を考慮しても今では考えられないような成長である。



急激な成長は大きなひずみも生じさせた。全国的に発生した公害である。この頃は環境への意識が低く、水俣病・イタイイタイ病・四日市ぜんそくなどの公害病などが人々の健康や生活を破壊し、社会問題になっていった。



名古屋の川も汚濁し、堀川も納屋橋を渡る時には鼻をつまみたくなるような悪臭を放っていた。41 年には小塩橋地点のＢＯＤが 54.8mg/ℓと最悪の状態になっていた。

ドブの堀川　浄化対策が始まる

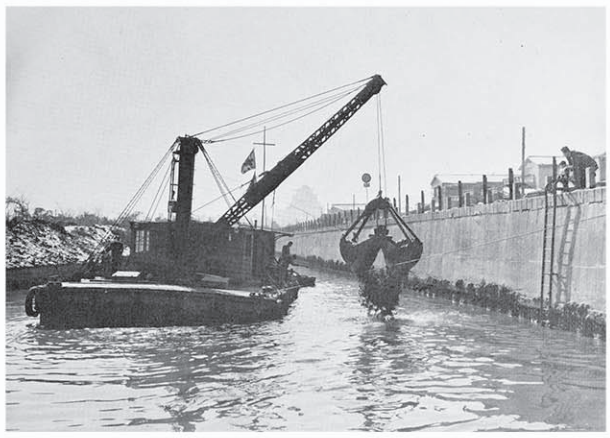
昭和 37 年から堀川などの水質調査が毎年行われるようになり、38 年に名古屋市土木局に河川浄化係が新設され、関係する機関もそれぞれ堀川の再生に向けた取り組みを始めた。

・名城下水処理場の建設と拡充

昭和 40 年に名城下水処理場が完成し、さらに、施設の増強が行われ 48 年に汚水全量を処理できるようになった。

・ヘドロの浚渫

昭和 40 年から 48 年にかけて、城北橋から大瀬子橋下流までの区間で浚渫を行い、29 万 5,000㎥ものヘドロを撤去した



ヘドロの浚渫　昭和41年
（名古屋市市政資料館蔵）

・木曽川からの導水調査・庄内川からの導水実験

昭和 38 年に庄内川から堀川への導水実験が始まった。この実験は 50 年まで行われたが、堀川のほうが庄内川より水質が良くなったとのことで中止された。

・水面清掃

昭和 34 年に㈳名古屋清港会がつくられ、日々清掃船により水面の清掃を行うようになった。また、関係行政機関や沿川木材業者などによる河川大清掃なども行われるようになった。

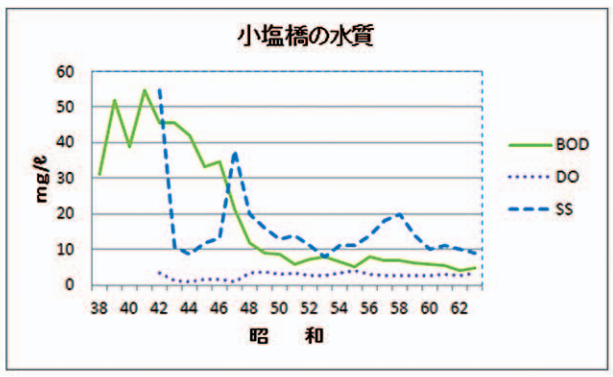
清港会の水面清掃　昭和40年
（名古屋市市政資料館蔵）

・浄化実験

昭和 40 ～ 43 年に光合成能力が高いクロレラを堀川などの水で培養し水中の溶存酸素を増やして浄化する実験が、44 ～ 47 年度には水中に空気を送り込んで浄化する実験が行われ、一応の効果があることが確認されたが、堀川で実用化するまでには至らなかった。

・啓発活動

汚れきった堀川に人々は背を向けていた。昭和 56 年から美化を呼びかける看板の設置が始まった。また堀川の歴史などを伝えるパンフレットの発行や、天然プール跡や堀留跡にその由来を伝える石碑が建てられた。



堀川は、今となっては想像ができないほどの 40 年代の汚濁から脱することには成功した。しかし日々汚濁の原因となる物質が流れ込むという都市河川の宿命を抱えている。その後は、より一層の浄化が期待されるなか、改善傾向を示しはしても大幅な浄化には至っていない。